

# 内務省土木技術官の更迭

## 一 記 者

○  
内務省土木首脳部の更新に就ては、随分昔から問題になつてゐた、歴代の局長が之を敢行しやうとしたのであつたが、多數の勅任官級を始末せねばならぬ、夫れに例の文官身分保障令があるのと、夫れを斷行するに就ては矢張り政黨的な注文もあれば、情實的な關係も起つて、餘程の確心がなければ出来ないで、此問題には尠なからず悩まされたものだ、なぜ更新を必要とするか、夫れは大正十三年原田貞介が内務技監を辭任してから一度も更迭をやらぬ、夫れ以前からでも大學卒業年次を標準にして、腕があらうが無からうが饒上り式人事をやつて唯た無難であれかしと消極的な考察に始終したからだ、で少々氣概のある連中は

此人事に愛想をつかして他に轉職するものもあれば、若い學校出のものは、いつまで待つても上級者が居握つてゐるので任官して呉れない、假令任官しても同じ河川や港灣の現場を持たされて榮達の途を塞いでゐる、そこで人事に對する不平不満の聲が起つて來るのも道理である。

人事の改革ばかりを目的としたのでは無かつたが、是等不平不満の氣配も手傳つて、高等官を以て組織する土木俱樂部の創設を見るに至つた、又判任官を以て構成する土木協會も設立さるゝに至つた、是等は團體的行動を以て凡ゆる土木の事件を平穩裡に解決せむとしたのであつたが、矢張りそこは役人根性の表はれで、是等團體の代表者は上級の官吏を以て充てなければならぬと考へた、其の勢で折角

の團體も矢張り役所的に取扱はれ、團體の個性的な新味は尠しも持つことが出来ない、假令夫等の團體が土木關係首脳部の更迭を策して見ても、團體の幹部が夫れに賛成しないと言つた調子で、團體的行動が餘り重きを爲さないの作業を煮やした連中も尠くなかつた。

技術官の仕事は事務官の夫れと違つてゐるから、政變ある毎に技術官を更迭せしむることは絶対に許すべきではない、鐵道省あたりは、あの技師は政友系だ彼は民政系だと言つて技術官を誡首したり復活せしめてゐるが、技術官に政治的に活動されては事務官は技術の眞正を疑はざるを得ないことゝ爲るので、之を避くべきは當然であつて、假令夫れに依つて若い連中に昇進の機會を與へることがあるにしても絶対に避けなければならぬ、併し其のことは技術官界の空氣が沈滞しても可いと言ふ事由とはならない、或る人が鐵道技術界は日進月歩の進出をしてゐるのに内務省は沈滞してゐると言つたが、今回の異動に依つて夫れの總てを解消することが出來た譯である。

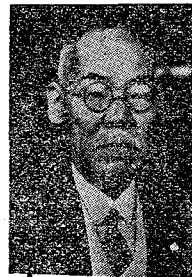
併し事件をこゝまで漕ぎ附けるに就ては、唐澤土木局長は尠なからず惱まされたと傳へられてゐる、彼は内務大臣秘書官時代から土木技術官の人事刷新を切望して、歴代の局長に懇懇したたが、夫れを容易に實現しやうともしないので齒痒く感じてゐた、ところが圖らずも自分が土木局長の椅子に据ることゝ爲つて夫れを解決せなければならぬ運命になつた、併し身分保障の規定が設けられてゐるので餘り手荒いことも出来ない、之が對策を考へてゐる折柄、土木俱樂部や土木協會の連中が人事刷新を要求して騒ぎだしたので、或は自發的に解決するのではないかと傍觀してゐたが一向夫れが進展しないばかりか、夫等俱樂部の決議なるものは何等の權威も價值も持たない、却つて事件進行の害になるばかりなので、各方面の事情を斟酌して一定の案を造つたが、夫れからと言ふものは色々な策動もあればデマも飛ぶ有様、之では到底斷行が出來ないと大臣の尻を叩くが、勅任官を一時に五人も勇退せしむることは盲斷ぢやと、隨分難色があつた、併し遂に事件の總てを唐澤局長に委ぬるこ

とに爲つて鼻が附いて、今回の發表を見るに至つたのだと傳へられてゐる。

發表當日記者は、内務省に唐澤土木局長を訪れて、思ひ切つた人事をやりましたネーと言へば、何も事新しい問題ではない多年の懸案を解決したまでのことだ、勇退して貰つた方には氣の毒かも知れないが、之も我が内務技術界に潑刺たる空氣を注入する手段として已むを得ない、俺はいつも憎まれ役に廻される運勢ださうだが嫌な運勢だ、併し之に依つて我が土木技術官界に新味を注入することが出来る、とすれば夫れに満足すると言つてゐた、まだ奏任官級にも手を附けて人事の刷新を圖ると言はれてゐる、以下少しく異動された人々に就て所見を述べて見やう。

勇退組の大親分は内務技監中川吉造氏である、彼は明治四年の生れだから當年とつて六十四歳、二十九年に東大工科を出てから今日まで三十八箇年の永きに亙つて内務省の飯を喰つたのだから、今勇退するに就て何の不足も無から

う、夫れに技術の最高官たる技監の職に約六年も居たのであるから詰り名遂げ功爲つての退官である、内務技監の職は形式上に於ては政府直轄の治水事業を監督統制することに爲つてゐるが、事の實際は内務省に於ける土木技術の總てを統制してゐるのであつて、此職には常に人格あり手腕ある人を以て充てられた、此制度が置かれたのは明治二十



中川吉造氏

七年であつたが、其の當時は今でも土木技術界の一大權威者として敬慕されてゐる、古市公威が任官してゐる、三十一年になつて夫れ

が依頼免官と同時に、是も土木技術界の權威者近藤虎五郎が事務取扱と爲つた、其の制度は三十五年に一度廢止されたが、其の後明治四十四年治水計畫が樹立さるゝと共に復活され、沖野忠雄其の任に就き、夫れから原田貞介、市ノ瀬恭次郎と言ふ順に爲つて中川氏が其の後を襲ふたのだから夫等前任者の聲望に鑑るときは餘り不足も言ひ得ない地

位である。

彼は東洋一と讃えられてゐる利根川改修工事に終始したやうな感がある、夫れは明治三十年土木監督署技師と爲つてから内務技監に爲るまで利根川改修工事に従事したからである、其の實地の體驗は遂に横利根閘門に關する論文を提出して學位を獲得せしむるところまで熱を持たした、今水郷利根川に旅する人は、佐原の川畔に彼の胸像が樹てられてゐるのを見るであらう、夫れは地方人士が中川氏の利根川改修に對する謝恩の敬意を表はした顯れである、勿論夫れは職務執行の勢であると言ふ人もあらうが、唯だ冷談に夫れを執行するだけなら、地方人士は何も好んで感謝の意を表しない、夫れを表すところに此事業に對する彼れ中川氏の熱意があつたのであつて、眞に寢食を忘れて従事したのである、或る事情通が利根川居士との敬稱を呈するの一面の事情を物語るものと言つて可い。永年重要な地位に居たのであるから、彼を敬慕する人も出来るし彼を信仰する人も生れて来る、そこで夫等の連中が彼に無關心に

意思的團結をする、夫れを他から又羨望する連中が燒餅半分に分ち中川黨と名を附ける、で彼が團結圈内に居る人々を乾分として公的生活に優遇したと非難する者もないではないが、彼れ中川自身は餘り左様なことに無關心で俺を慕つて来るものは、感情や情實に支配されて夫れを排しやうとはしない、出来ることなら優遇して世話を焼くのが彼の性格である、だから當初は彼に反抗的態度を採つて居た者も再び彼の世話に爲つて一生を暮して居る者が尠くない筈である、併し此溫情の持主も條理の立たないものに對しては極力之に反對する、先年彼が會長として統制してゐる土木俱樂部の連中が、内務技術官界の改革を要求し勅任官の停年制の樹立を政府に要求しやうとした、彼は夫れ迄のことに賛成したのであつたが、或る策謀家が居て、夫れの樹立さるゝまでに現在勅任官の進退にまで論及したので、彼は其の要求を一蹴して闘つた、身官吏でありながら人事の實現を上長のものに迫るが如きは不謹慎であると言ふのであつた、全く條理は其の通りである、彼が其の要求を言

下に排斥して鬪つたのは當然過ぎる程當然な事と信ずる。此の彈力あるところに彼の本心を窺ふことが出來やう。併し條理は假令其の通りであるにしても、部下から其の要求を聞くまでに、彼が適當な後任者を推薦してモ一尠し早く退官してゐたら、今回勇退した以上に人は彼を賞えるのであつたであらうが、少々遅れたのは進退を誤つたかのやうにも見へる。

我國治水事業に多大の貢獻をした彼の退官を見るのは今更心惜しい心地もする、今年の議會で問題に爲つた例の鬼怒川改修工事に於ける堰堤廢止の問題は、其の原因が事前豫知し得べきものであつたか否かは別問題であるとしても、地質に關する大家の鑑定を求め、夫れが指導に従つて計畫したものであつたから、次田大三郎や大塚惟清に有利な事業であることを吹聴したのであつて、彼等を瞞す積りでは無かつた、併し土木技術の應用には地質に關する智識が必要なことは言ふまでもないことで、貴族院豫算分科會に於ける次田、大塚兩議員の主張に反對することは出來な

い、併し此計畫の樹立に就ては博士物部長穗が専ら調査研究して建言した結果を採用したのである、だから夫等のことを捉え來つて彼の治水事業に對する從來の功績を評價するの理由とは爲らないのである。従つて彼中川氏が、我國治水事業に對して捧げた功績は、夫れに依つて何等傷付けらるゝものではない。矢張り佐原に建てられた彼の胸像と同じやうに萬古に没することが出來ない、殊に國家が從來彼に與へた物質的精神的の利得以上に、彼に獲得せしむべき他の事業があつたにも不拘、彼が夫等の利慾に顧ることなく一生を全く我が治水事業に盡したことは、事務官が一定の榮職に在るより以上に國家に對して功勞あるものと言はざるを得ないのである、而して國家は後者に對しては往々にして之を優遇するに貴族院議員を以てする場合が尠くない、固より之も必ずしも咎むべきではなく當然的に行はれてゐる以上は、夫れより以上に國家に功勞ある者に對し同一の優遇方法を講ずることは當然過ぎる程の當然事であるのみならず、賞罰を公正ならしむる所以である、筆者は

氏の退官に方つて國家が其の方法に依るべきことを調強する、土木俱樂部の連中が常に技術官界の向上發展の爲に此種の方策を主張し我國土木技術の進歩を所望してゐるが、筆者の主張は響て我國土木技術乃至は技術官界の向上發展を誘致する事と爲るのであるから、此際特に之を策して目的の達成に進まむことを所望すると同時に、中川氏永年に互る功績に對し深甚の敬意を表する。

○  
内務省第一技術課長を退官された前川貫一氏も、中川吉造氏と殆ど同一の経路を採つた人である、中川氏とは二年遅れの生れであるから當年六十二歳、中川氏よりは一年遅れて東大工科を出て矢張土木監督署技師を勤めた、監督署時代は今の土木出張所とは違つて地方廳の土木行政を監督する事も職務の一つであつたから氏も亦地方土木行政に係するに至つた、併し夫れは主として雪の多い新潟方面であつた、そして一方信濃川改修の計畫調査に従事したが、同じ事業に従事してゐた三池貞一郎や安藝杏一が洋行する

のに自分獨りが取残されたのを不平に目を送つてゐたが、東京出張所に轉勤して江戸川改修事務を擔當するに至つた、併し夫等は何れも技監沖野忠雄が彼を可愛がつた勢だとも言はれてゐる。

氏は當時の沖野技監の切な希望に依つて、山本桑太郎の主宰する日本電氣會社に這入つて大に腕を振り積りだつた



前川貫一氏

が、山本の計畫は他の電氣事業者に裏を搔かれて成功しない、夫れに氏の性格が會社向でないので再び官途に就いて。木曾川改修事業の調査に従事したが、同川の治水計畫に關しては愛知と岐阜兩縣の利害必ずしも一致するものではない、既に徳川時代に於て薩摩武士の流血の慘を見た事業であるので、其の計畫は斯界の重視するところであつたが、彼は見事に夫れを解決して木曾川改修計畫の實現を見るに至らしめたが、昭和三年第一技術課長として本省に這入り現在に及むだの

である。

今回の退官は其の年齢からして己むを得ないことであるが、彼が温厚な紳士として部下を人格的に指導したことは今も尙省内の話題に上つてゐる、併し温厚な紳士的態度は我利的な一部人士とは意見が合はない、殊に事務官萬能主義に總てが行動されることに對して尠ならず不満を抱いてゐたと言ふことである、彼の退官に方つて部下の技術官は人格者たる彼を省内から失ふことを惜しむだと言はれてゐる、彼は恬憚な人であるから悠々として餘生を送るであらうが、筆者に向つて自分は五年毎に更迭する運命を持つてゐる、浪人生活の五年後は何に更迭するだらうと話してゐるが、人間の運命はそう短的なものではない、大に安堵して郷里琵琶湖利水のことでも研究し餘生を送つて貰ひたいものだ。

○  
東京土木出張所長を退官された眞田秀吉氏も、前川氏と同じ明治六年生れで當年六十二歳、今回の退官も順序から

して當然であらう。彼も亦明治三十一年東大工科を出てから内務省に遣入つて今日に至つた言はゞ内務省生え抜きの技術官である、大正六年内務省が施工してゐた淀川が破壊して大阪や尼ヶ崎が浸水し大問題を起したことがある、當時彼は東京土木出張所のひら技師であつたが、其の善後措置を計畫する者は彼を措いて他に無かつたので特に彼を大



眞田秀吉氏

阪出張所長に配して計畫せしめた、彼のお蔭で淀川増補工事が計畫され、唯だ治水的に淀川を征服したばかりでなく、天與の淀川水を

利用することに爲つたのも彼に負ふところ頗る多い、夫等に依つて得られた體驗は彼をして土工の權威者たらしめ學位を取得せしむるに至つてゐる、曩年道路改良會の講師として土工學の講演を煩したが、實地の經驗から割出された其の理論には何人も敬服したと言はれてゐる位に、我國土木技術界に於て土工學に關し彼の右に出ずる者はない。

彼は基督教徒たる勢でもあるまいが、寡欲恬憺常に部下を愛撫し家族的に所内を納めてゐたと言はれてゐる、従つて彼の退官に方つて部下の一部は引き留めを勧告した想であるが、我が土木技術界の大勢からすれば早く退官するのが當然であると言つて、夫等の勧告を斥けた、出来得るところとなら成るべく留任したいと策動する連中と變つたところに彼の性格を窺ふことが出来るであらう、好漢自愛して土工學の傳授に勉めて貰ひたい。

大阪土木出張所長を退官した坂本助太郎氏は、今回退官組の内で一番の若手である、と言つても明治七年生れだから社會的に見れば退官するも已むを得ない歳であらう、彼も亦内務省生え抜きの技術官であつて明治三十三年東大工科を出てから現在に至るまで内務省に勤めた人、當初の程は大阪や東京出張所の所轄に屬する河川事業を擔任してゐたが、大正十三年神戸土木出張所長と爲つて神戸築港の事業を主宰し、昭和三年現職に据つたのである、大阪を利し

聊もすれば大阪を害する淀川の治水に關して多大の貢獻したことは筆者が事新らしく紹介するまでもない、其の勢であらう琵琶湖の水量調節に關する論文を提出して學位を得て居る。

彼は普通の技術官と違つて、與へられた内務省の直轄事業のみに没頭しなかつた、夫れは永年關西地方に居た勢で



坂本助太郎氏

もあらうが、關西方面に於ける公共土木事業に對しては骨身を惜まず指導役を勤めた、著大な事業を起與する者は一度は彼の門を叩いて意見を聞くのである、そうすると彼が持分の親分肌を表現して吾が事のやうに斡旋の勞をとる、彼が關西に於ける土木技術界の重鎮として重きを爲しつゝあるのも當然であらう。此く好評を博してゐたから今回の異動に方つても彼が技監に昇格すると言ふ噂があつたのも無理はない。

彼は靄氣と親分肌とで終始せむとするから、聊ともすれ



ば夫等の氣概に缺けてゐる關西人は彼を無上に敬慕する、従つて彼の部下は其の恩義に感じて彼に殉せむとする者が尠くない。

今回の異動に方つて彼を敬慕する技術官連中は、彼が技監に昇格せむことを策動したとも傳へられてゐる位に、好評を博してゐた、内務省脳部も亦彼の手腕のあるところと人氣の可いのに鑑て、彼を技監に据えることに就ては異論も無かつたのであるが、眼先きの見へない連中が手を替へ品を換へ策動するので、夫れを實現せしむるときは技術官界に黨派を造る原因と爲ると言ふので立ち消えに爲つたとさへ傳へられてゐる。彼れ坂本氏は彼等策士連に組するやうな男ではないが、彼を敬慕する連中の策動の爲に却つて迷惑を蒙つたものと言つて可い。

近時は不幸が續いて愛妻を失ひ次に長男に先き立たれ寔に同情に堪へないものがある、併し夫等は挽回することの出来ないことで運命と諦る外ないのであるから、好きなダンスでもやつて若返ることが必要である、夫れと同時に關

西に於ける公共土木の爲に智識を貸してやつて貰ひたい。

仙臺土木出張所長の坂本丹治氏も退官したが、彼も前川眞田兩氏と同じ六年生れで、同じ經歷を辿つてゐる人だから退官は順序上已むを得ない、彼は在官中主として新潟や仙臺の雪深きところに配せられて、土地的に恵まれてゐな



坂本丹治氏

いが、所謂雪國地方に於て多くの土木事業を残してゐる、新潟港の修築と言ひ北上川や雄物川の分水路の工事は何れも彼の手に依つたものである、従つて分水路の計畫や施工に就ては彼の右に出る者はないと迄囃されてゐる。

彼は男性的意氣を遺憾なく發揮するところに彼の個性を窺ふことが出来る、曩年内務省土木局長であつた快男兒湯澤三千男が、宮城縣知事をしてゐる時代は同氣相求めたものか二人は兄弟のやうに親密であつた、従つて彼も亦宮城

縣の生命線とまで言はれた鹽釜築港に關しては、我が兒を養成するやうに熱心に執行したものである、今や官を退くに方つて從來執行して來た業績に想倒するときは、大に氣を安むるものがあらう。

退官組に引き換え内務技監の榮職を捷ち得た青山士氏は



青山士氏

は、明治十一年生れだから當年五十八歳、餘り若い方ではないが、六十四歳が引退して五十八歳が後を襲つたのだから内務技術官界は六歳若返つた譯で、喜ぶ筋道も立つ筈である、彼は是迄筆した内務系技術官とは少し毛色の變つた歩き方をしてゐる、即ち三十六年東大を出ると直ぐ紐育に渡つて一年間鐵道會社の測量手と爲つて測量の實地に従事し、夫れから四十五年まで七年間米國政府に雇はれてパナマ海峽の測量や設計に従事した經驗の持主である、歸朝後直に内務技師と爲つ

て荒川の改修に従事したが、例の失敗工事、信濃川分水路自在堰の復舊に方つて當の責任者として新潟土木出張所長に轉じたのであつた。

人は今回の榮進を以て破格のもの見てゐるやうであるが、大學出身年時のことを標準にするのは間違つてゐるとしても、三十四年出が退官した以上は三十六年出が後を襲ふのは當然であるばかりでなく、彼は米國に於て人知れず苦勞してゐるから工事に對する眞念を有する、夫れは慌てゝ執行した信濃川自在堰の復舊の爲に特派されたことに徴しても明かであるやうに、自己眞念の存するところを柱げない、従つて随分細いところまで研究するから、最高技術官として最適任と言はざるを得ない、併し内務技監の權限は前にも言つたやうに、内務省に於ける土木技術の最高權威を振り舞くことにあるのだが、夫れは總ての技術官の身分にまで口吻を入れることを許されてゐない、言はず技術に關する限度に於て活動することを許されてゐるのである、此限界は原田技監時代までは嚴格に守られたが、其の

後は聊ともすれば混交して口嘴を入れるやうに爲つてゐたやうだ。併しながら其の限界を守らないと思はぬ不覺な目に遭ふことは前任者が苦い經驗を有してゐる筈である。此ことを特に言ふのは、氏が赴任早々土木局員を集めて挨拶をして、自由と責任と言ふ名題下に言ふやうに奴隸は自由を持たないから責任がない、自分は諸君に自由を與へるから責任を持つて呉れと言ふ様な意味を訓示したとやらで、是を聞かされた事務官は内々蔭口を言つてたやうだつた。併し夫れを聞きに態々出席した事務官連中もドーかしてゐるが、技監の職務は出張所長としての夫れとは違ふのであるから、コ一言ふ點に氣を付けてゐないと頗だ不覺を招來する、マ一是等は初任當初の些細な間違で言ふに足らぬことであるが用心すべき點であるう、夫れは兎も角鬼怒川問題で技術の權威を疑つてゐた貴族院の連中は此度の異動で安心しても可いだらう。

○ 谷口三郎氏が第一技術課長に爲つたのも當然の榮進と言

つて可い、蓋し同期の牧野、福田、金古の三氏がとうの昔勅任に爲つてゐることや、彼が第一技術課の首席技師であつたことに依つて當然附けられるからである。彼は永らく北海道廳技師をしてゐたが爲に今日まで勅任に爲ることが遅れてゐたのであるから今回第二技術課長に爲つた鈴木君のやうに嬉しがつて居ないのも道理である、彼は濃厚篤實



谷口三郎氏

で地方廳の者に對しては手を取つて教えるやうに懇切丁寧に指導するので、地方廳の連中には尠なからず尊敬されてゐて頗る評判が良

い、併し第一技術課の職分は地方公共土木事業に關する技術の監督が主であつて、其の管掌する範圍は彼が從來取扱つてきた河川技術だけではない、従つて一々之に關する課長としての意見を決定するには餘程の苦心と勉強とを要する、夫れのみではない事務當局と常に連絡を採つて善處する必要がある、併しながら餘り事務家の言ふところに迎合

してゐては技術の權威を發揮することも出来ない。そこが技術課長として六ヶ敷ところでもあれば又一面妙味のあるところでもある。唯だ部下の技師が判を押したものに盲印を押してゐては役目が勤まらない、どうか甘くやつて聊ともすれば技術一方に扁した理屈を抑へて土木行政監督の實を擧げて貰ひたいものだ。

大阪出張所の首席技師であつた山内喜之助氏が、神戸出張所長と爲つた、彼は四十二年東大工科の出身であるから谷口氏等と同じやうに、もつと先きに勅任官たるべき人であつたのであるが、今日まで遅れてゐたのであるから當然の榮進と言つて可い、彼は大正三年の昔から大阪出張所に入びたりと爲つてゐたが、常に學究的態度を以て總てを研究し他人の研究に屬するものを無條件に肯定するやうな男ではない、而かも研究に依つて得られたところを人に誇らず言はず無言の裡に實行せむとする熱意を持つる。友人某が彼を目して四十二年のピカーと讃えてゐるが、夫れは兎も角として、阪本助太郎氏が主宰した大阪出張所が一權威

を持つてゐたのも、彼に負ふところが尠くないと言はれてゐる、位に尊重された、永らく不遇の地位にあつたのも夫等の方が原因したとも言はれてゐる、豫算漸減の爲に神戸出張所の任事は尠いので彼の爲には役不足の感があるが、例の調子で研究して新味を發揮することが必要であらう。

仙臺出張所の伊藤百世氏も、新潟の所長に榮進した、彼も大正二年の東大出だから八ヶ間敷離し立てる程の榮進でもない、併し彼をして今日あらしめた所以のものは、彼が濃厚の人として否な鈍重な人として、不平も言はないで眞面目に立ち働き、所長の坂本丹治氏を援けた功績の酬ひとでも言ふべきであらう、仙臺から新潟へは雪の國を涉つて歩いてゐるやうなものであるが、坂本氏が在職中常に原始的河川の改良に相當の効果を收めたことは彼に負ふところが尠くない、彼の手腕力量を以て新潟出張所々管の汎土木を甘くやつて貰ひたいものだ。

○ 鈴木雅次氏が第二技術課長の職に就いたのは、今回の異

動に於ける白眉である、官等の順序から言つても彼の先きには十數人の先輩もあるのに夫等の連中を一と足お先きに飛越えての榮進であるからだ、勿論彼は大正三年九大工科を優秀の成績で出て學位を持つてゐるのと、第二技術課に籍を置いてゐたことが、彼をして今日の幸福を得しめたのであらう、口善悪ない連中は彼は、唐澤土木局長と



鈴木雅次氏

中學時代からの友人であつたから特別の扱を受けたのだ、イヤ小利巧に立ち廻つて中川前技監の寵兒と爲つたからだ、と色々に評するものもある、併し此度の人事には少しも情實が加味されてゐない所謂唐澤一流の見地に於て決定されたものらしい、夫れと言ふのは彼が假令局長の友人であるにしても、彼と殆ど同一の経路を持つ三浦七郎氏が、牧野氏の後任として勅任官を連命附けられてゐることに依つて明かであらう、後説は中川前技監の寵兒が地方落ちをやつてゐることに徴

しても當つて居ないことは明かで、此様な譯で筆者は評言を肯定するのに躊躇する、併しながら同僚が眞の友人として彼と交際するものの尠なかつたのは、彼が信州人間の持つ缺點を發揮して言ふべきところを言はないで胸の裡で笑つてゐるやうな態度を採るから、つき合ひ憎い人とされたのであらう。彼も勅任官になる以上は、是までのやうな技術官に珍らしい程の皮肉を言はないで、與へられた職務を忠實に執行することが今回の榮進に酬ゆる途であらう。

三浦七郎氏の國道改良係主任も、勅任牧野氏の後を襲つてゐるのだから鈴木氏と同じやうに近く勅任官に任命されるであらう、彼も鈴木氏と同一の經歷の持主であるが、鈴木氏よりは三年前に任官してゐるから鈴木氏程の榮進振りでないにしても今回の異動に於ける幸運兒と言つて可い、彼は常に青年技術官を可愛がつて面倒を見てやるから夫等の連中から尊敬されてゐるので、夫れを背景に活動し過ぎると言はれてゐる、彼が人の世話すきな點に於て他の同輩に見ることの出来ない美點を有するが、一面自己の

意見を貫徹せしめむと急るが爲に敵をも持つてゐる、世間  
に味方を得ることは男子として寔に痛快事である、併しな  
がら味方を得むが爲にことを策するのは小人の爲すところ  
であつて探るべきではない。夫れこそ青山技監のやうに自  
己信念の下に集まつて来る味方を得ることこそ眞の痛快事  
である。餘り策動せず彼れ固有の性格を發揮して貰ひた



浦三七郎氏

い、由來國道改良係の仕事  
は直轄國道工事を統制する  
のが役目であるが、執行者  
は勅任官たる出張所長であ  
るから改良係の思ふまゝに  
は行動して呉れない、從來は兩者の協調が餘り甘く保たれ  
てゐなかつた嫌がある、従つて夫れを協調して統制するこ  
とが彼に與へられた新使命でもある、餘り急がずに新使命  
を實現することが彼の任務であらう。

名古屋から東京へ轉じた辰馬鎌藏氏、神戸から大阪へ轉

じた高西敬義氏、下關から名古屋へ轉じた金古久次氏等  
は、先輩の退官に伴ふ自然的異動であつて、可もなければ  
不可もない、榮轉と言へば榮轉、凡轉と言はゞ夫れでも可  
い程度である、蓋し土木出張所の地位乃至價值は府縣の夫  
れと違つてゐるからである、事業本位からすれば事業費豫  
算を澤山に持つてゐる出張所が上級と爲るが、其の事業費



辰馬鎌藏氏

たるや年度毎に増減する、  
又一面出張所の所在する都  
市の地位からも判斷するこ  
とが出来て觀點に依つて異  
るのである、辰馬氏にして  
も、所管する事業に於て餘り大差が無いにしても、鞏毅の  
下に來たのであるから榮轉たるは言ふ迄もない、高西氏に  
しても聊ともすれば役不足の感あつた神戸から俄に澤山な  
事業を持つ關西唯一の都市に來たのであるから之も榮轉、  
金古氏も六大都市に數えらるゝ名古屋へ來たのだから是も  
榮轉、此く觀れば左遷組は一人もゐない筈だから、氣持よ

く働いて貰ひたいものだ。

内務本省勤務から地方へ出たものに福田次吉氏と牧野雅



福田次吉氏



牧野雅之丞氏

は、内務技師として二回まで洋行し歸朝すると牧博士の後を襲つて土木試験所長となり、復興局が出来ればその主任技師となり、復興局の廢止に依つて内務省へ逆戻ると言つた調子で、其の幸運なことは他の技師の羨望的と爲つ

樂之丞氏とがある、福田氏

は第二技術課長から仙臺へ

轉じた、牧野氏は國道改良

係主任から下關へ轉じた、

兩君とも四十二年の帝大出

身歳は牧野氏の方が三つ上

で當年五十二歳、何れも春

秋に富む連中であるが、之

まで餘り地方生活をやつて

ゐない、殊に牧野氏の如き

てゐたもの牧野氏が磊落で放膽であるに反し福田氏は眞面

目一點張りで冗談一つも言はない性格だが、兩君共に中川

前技監の秘藏兒として可愛がられ、夫れに對應して兩氏は

中川氏を援助したものだ、今其の中心人物が退官したの

で、古い言葉ではあるが可愛兒には旅をさせと言ふことで

地方落ちをするやうに爲つたのであらう、併し何も之を苦

にして不平などと言ふべきではない、之までの役に比較す

ると出張所の方が忙しい筈、是まで樂してゐたことを精算

する算りで大に活動し、將來技監と爲るべき修練を積むこ

とが兩君將來のため利益であらう。